

'67年、歓談する井深
(左)と盛田。井深が盛
田より13歳年長だった。
ともに「遊び心」を大切
にしていた二人の、親
密な笑顔が印象的



盛田昭夫と井深大

この二人が出会わなければ……

運命に導かれるように



焼

け野原の日本で創業し、世界的企業へと急成長したソニー。創業者の井深大と盛田昭夫は運命に導かれるように出会った。旧制中学時代の盛田は、すでに発明家として知られていた井深の発明が、科学雑誌に掲載されていたことを不思議とよく覚えていた。いわば「出会いの前の出会い」。

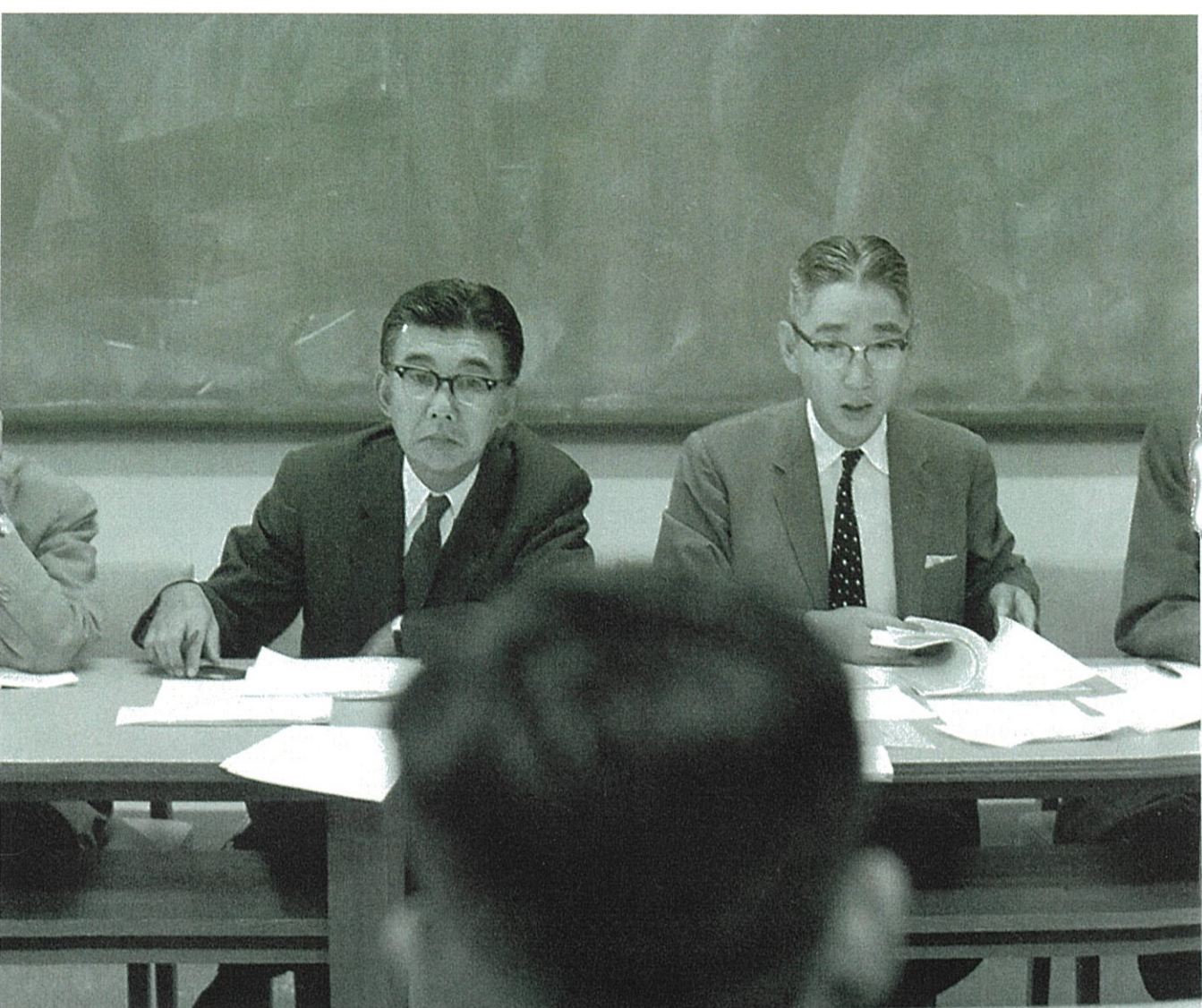


上は、創業翌年の'47年、品川御殿山に本社を移転した直後の二人（右が井深）。左は'59年の二人。テープレコーダーなどで成功し、'58年に社名を「ソニー株式会社」にあらため

いだ。そして二人は45年、海軍将校（＝盛田）、そして、軍から兵器の開発を委託された企業のトップ（＝井深）として、戦時研究委員会という場で初めて相見える。意気投合するも、やがて敗戦がその関係を引き裂いた。敗戦直後、会社を起こした井深は、ラジオの改良・修理で評判を呼び、朝日新聞の「青鉛筆」というコラムがそれを報じた。

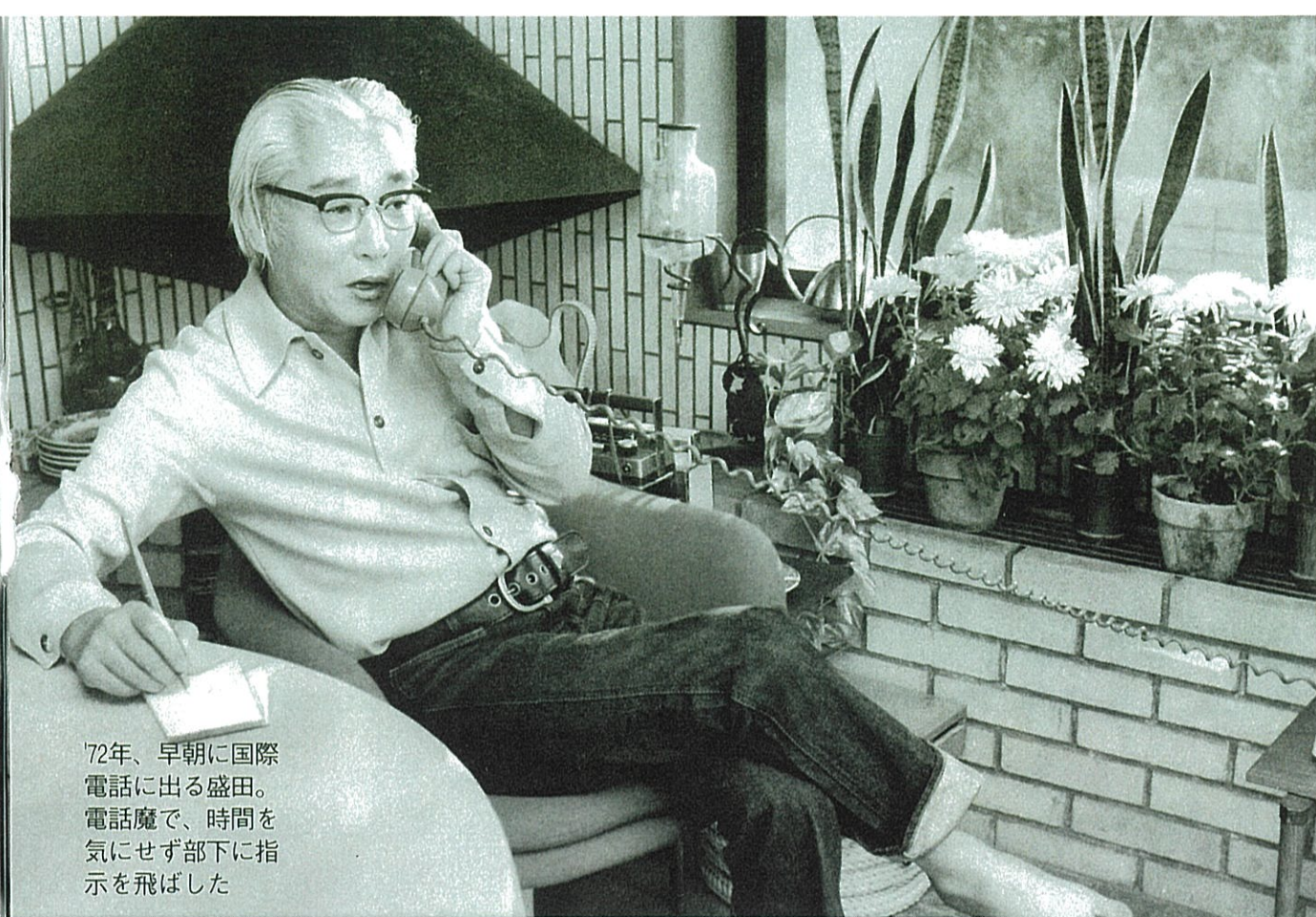
「運命を感じるのは、このコラムを盛田さんがたまたま目にしたこと。井深さんの活躍を知った盛田さんは上京して井深さんに合流し、再びともに事業の道を歩むことを決意します」（盛田の会長秘書役・大木充氏）
愛知の伝統ある造り酒屋・盛田家の跡取り息子である盛田とともに事業を始めるため、井深は盛田の父・久左エ門を説得。承諾を取り付け、'46年5月、のちにソニーとなる東京通信工業がスタートした。

'60年、採用面接に臨む二人（右が盛田）。この年、厚木に工場が新設されている。ソニーは急拡大していた





'69年、トリニトロンの新機種を発表。海外展開に積極的な盛田は海外赴任する部下に「日本人で徒党を組むな」と語った



72年、早朝に国際電話に出る盛田。電話魔で、時間を気にせず部下に指示を飛ばした

「ないもの」を補い合う二人

盛

田さんは社内で「井深さんの夢を実現させよう！」とよく言っていました」（前出・大木氏）

天才技術者の井深が製品を開発し、辣腕経営者の盛田が世界中に売る——パズルのピースのような「相互補完」の関係にあった二人は、テープレコーダーやトリニオンカラーテレビを次々とヒットさせる。

「二人は両極端と言ってもいい性格で、互いに補う関係にありました。とくに盛田さんは、自分ない能力や魅力を井深さんに見出し、ていたんでしょ。井深さんに惚れ込んでいました。井深さんは子供のよう

な人を疑わない純朴な方。そして、海外で買って来たおもちゃを分解して楽しむような生粋のエンジニアです。よい製品を作ることにまったく裏表がなかった。一方の盛田さんは優しい人ですが、合理主義者でや

盛田はテニスなどスポーツを好み、井深は「脳の活性化のためには指先の動きが重要だ」と麻雀を好んだ。趣味も対照的



やドライな性格。24時間仕事のことを考えているワーカーホリックでした。テニスや水泳もするけど、それも真剣そのものなんです。もっとも、戦争に負けた日本を再興させたいという純粋な思いは二人に共通していました」（同前）

ソニーの代名詞といえば79年に発売された「ウォークマン」だが、そこでも二人のコンビネーションが生きた。発端は、井深が海外出張の長時間フライト中に良い音質で音楽を聴きたいと思ったこと。試作品を見て盛田はヒットを直感する。社内の大半が「録音機能とスピーカーをなくすなんてあり得ない」と猛反対するなか開発を進めた。

「在庫を心配する事業部、営業部隊を説き伏せ『私が責任を取るから』と言って最初の生産量を3万台に引き上げさせた。井深さんの直感への信頼もあったのかもしれません」（同前）

「ソニーの二人」略年譜

- 1908 (明治41)年**
井深が栃木県に生まれる
- 1921 (大正10)年**
盛田が愛知県に生まれる
- 1945 (昭和20)年**
新兵器開発のための「戦時研究委員会」で海軍中尉の盛田と、「日本測定器」の常務・井深が会う
- 1946 (昭和21)年**
5月、ソニーの前身である東京通信工業株式会社（東通工）を設立
- 1950 (昭和25)年**
日本初のテープレコーダー「G型」を発売
- 1955 (昭和30)年**
日本初のトランジスタラジオ「TR-55」を発売
- 1958 (昭和33)年**
社名を「ソニー株式会社」に変更
- 1963 (昭和38)年**
盛田がアメリカ駐在を開始
- 1965 (昭和40)年**
世界初の家庭用ビデオテープレコーダー「CV-2000」を発売
- 1966 (昭和41)年**
東京・銀座に「ソニービル」が完成
- 1968 (昭和43)年**
トリニトロンカラーテレビ「KV-1300」を発売
- 1971 (昭和46)年**
井深が代表取締役会長に就任、盛田が代表取締役社長に就任
- 1976 (昭和51)年**
井深が取締役名誉会長に就任、盛田が代表取締役会長に就任
- 1979 (昭和54)年**
「ウォークマン」を発売
- 1986 (昭和61)年**
盛田が経団連副会長に（～92年）
- 1992 (平成4)年**
井深が文化勲章を受章
- 1994 (平成6)年**
盛田が名誉会長に就任
- 1997 (平成9)年**
井深が死去。享年89
- 1998 (平成10)年**
盛田がタイム誌が選ぶ「20世紀の20人」に日本人で唯一選ばれる
- 1999 (平成11)年**
盛田が死去。享年78

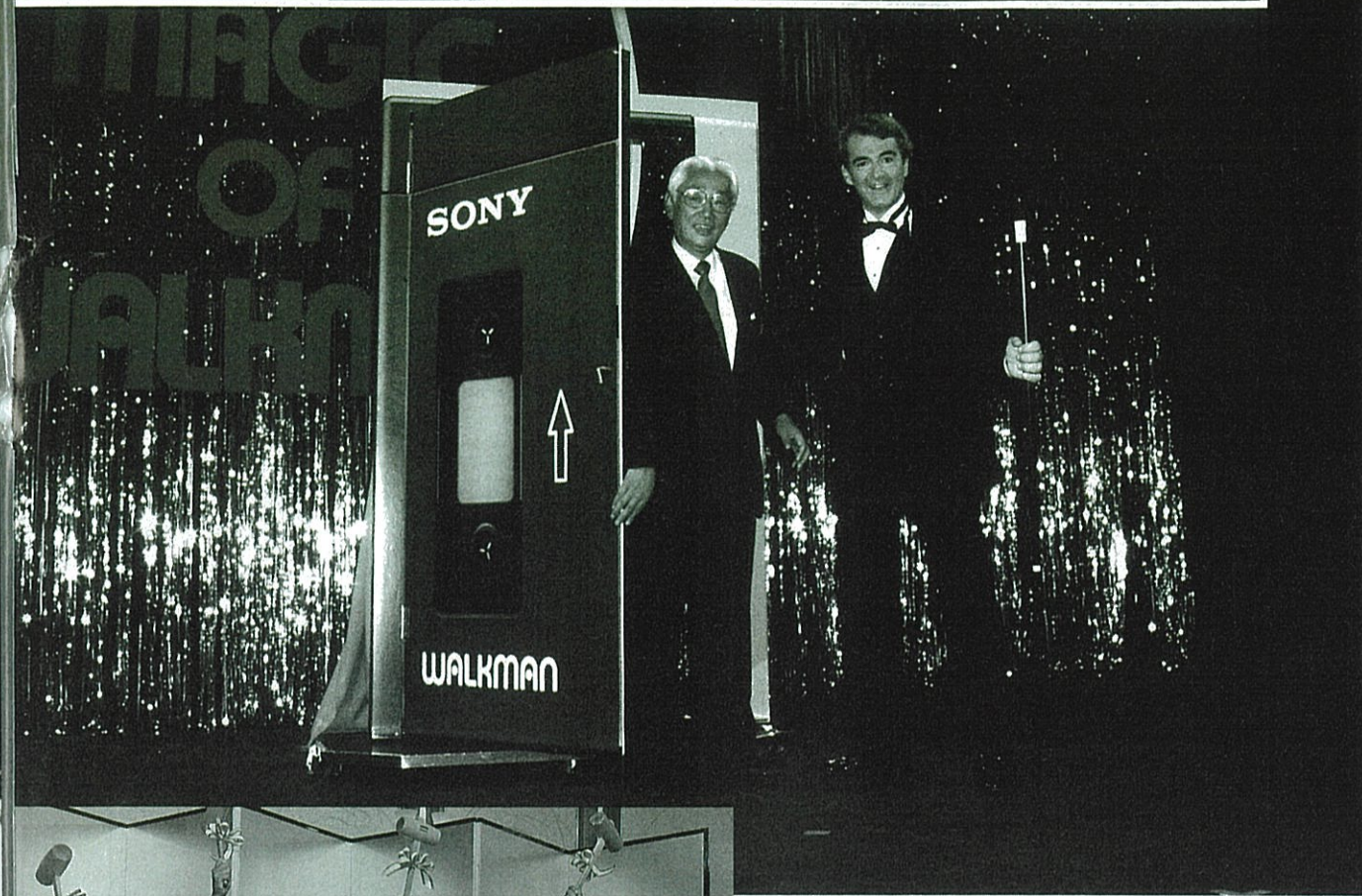


92年、文化勲章を受章したときに開かれた「祝う会」。二人の出会いから47年経っていた

とがわかるんだよ」と言った。実際にそのようにしておこなわれた会見中、井深はこう言った。「『自分は製品の開発など好きなことをやってきた。面倒なことは、みんな盛田さんが引き受けてくれた』とおっしゃったんです。隣でそれを聞いていた盛田さんは目を赤くしていらっしやうって……。

互いに高め合い、尊敬し合える二人が出会い、これだけの事業を成し遂げることができた。あたかも天が意図したかのようなお二人の特別な絆を感じたものです」（原氏）

盛田が目を赤くした理由



上はアメリカでのイベントに出席する盛田。盛田は、海外でも「ウォークマン」という商品名を使うことにこだわった。左は、'89年に井深が文化功労者となったときの写真

90年代初頭、すでに経営の一端を退いていた井深だが、盛田が働く會長室を、車椅子に乗って月に一度ほどの頻度で訪れた。盛田は井深の顔を見るとき、

「ここでごはんを食べていきませんか」と會長室と一緒に食事することを好んだという。前出の大木氏が言う。「會長室でご飯を炊かせて食事をするんです。長いテーブルの端の角に二人でくっついて並んで座ってね。まるで恋人のような雰囲気、私たちがちよつとそこにいるのが憚られるくらいでした。互いにリスベクトする二人が睦まじく語り合う、すばらしい光景でした」

40年以上苦楽をともにした二人にしかわからない世界がある——92年、井深が産業人として初めて文化勲章を受章した際の会見でもその強い絆が示された。当時、井深は脳梗塞の影響で発語がやや不明瞭だった。広報の現場にいた原直史氏（のちに広報担当役員）が、上司とともにそのことを盛田に相談すると、

「私が介添え役になる。私は井深さんのおっしゃるこ

「ソニーは井深さんの夢を
叶える会社なんだ」

—— 盛田昭夫



67年の二人。ともに市場調査に否定的で、「見たことのない商品を作る・売る」ことに命を燃やしていた

「面倒なことはみんな
盛田さんが引き受けてくれた」

—— 井深 大